

【ポスター発表】

個別課題から地域課題の抽出方法について

—A市地域ケア会議でのワークショップ実践を通して—

○ 関西福祉大学 藤原慶二 (6433)

キーワード3つ：個別課題、地域課題、ワークショップ

1. 研究目的

地域ケア会議の開催は2016年度より毎月開催するように義務化された。この地域ケア会議には①個別課題解決機能、②ネットワーク構築機能、③地域課題発見機能、④地域づくり・資源開発機能、⑤政策形成機能の5つの機能が掲げられている。本報告では③地域課題発見機能に主眼を置きつつ、④地域づくり・資源開発機能まで包含する。

①個別課題解決機能の「方法」として②ネットワーク構築機能が位置づけられている。この過程は個別事例の検討によって関連づけることができる。本報告は、その後の③地域課題発見機能への展開方法について明らかにしたい。特定の専門職による「職人技」ではなく、④地域づくり・資源開発機能を見据えて地域課題が共有化できる仕組み（専門職だけでなく地域住民を含め）を目指す必要があるだろう。

地域包括支援センターにおける地域ケア会議の役割が強化されている中、本研究が明らかにしたことは今後の地域包括ケアシステムの構築に寄与すると考えられる。

2. 研究の視点および方法

【研究の視点】研究の視点として①地域住民の視点、②専門職の視点の2つとする。A市での取り組みを基に個別課題の検討から地域課題の抽出についてワークショップを用いた協働の場を創造した。A市の現状は②のみであることを前提に置きつつ、①をどのように組み込むのかを明らかにする。そして、地域包括ケアシステムの構築において地域住民、専門職がどのような仕組み（ワークショップ）を活用して協働すべきかを考える。

【方法】A市で2016年度に実施した地域ケア会議の個別事例からワークショップで地域課題を抽出した。本報告では、その過程全体を示すとともに、一つ一つの過程で「何を目的に」、「どのような取り組み（方法）をしたのか」を明らかにする。ここで取り上げるワークショップは山内（2014：12）による「導入→知る活動→創る活動→まとめ」の過程を応用し、本研究で求められる内容に改変した。個別課題から地域課題を抽出する過程でワークショップの組み立て方を提示する。

3. 倫理的配慮

本報告は日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守している。加えて、実践事例についてはA市担当者に事前確認をとっている。

4. 研究結果

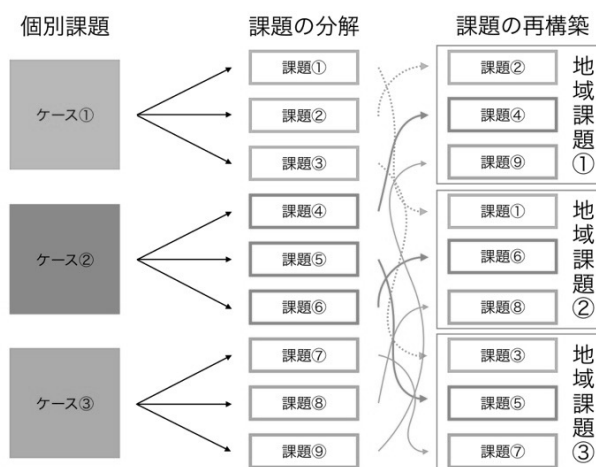
A市地域ケア会議で個別事例の検討から地域課題の抽出に取り組んだ。以下がワークショップの過程である。

導入：2016年度の地域ケア会議の個別事例の取り組み状況の共有を行なった。そして、参加者の知識が共通化することが「知る活動」の前提条件とした。

知る活動：個別事例に包摂されている複数の生活課題を分解した（※A市地域ケア会議ではこの段階を地域包括支援センター職員によって取り組むことで時間を省略した）。

個別事例を一つの課題ではなく、複数の課題を包摂した複合多問題として捉え、それを一つずつ付箋やカードに分けた（右図の「個別課題」→「課題の分解」参照）。

創る活動：地域課題の抽出に取り組んだ。従来のカードワークの手法を用いて、個別課題に包摂されている複数の課題を再構築した（右図の「課題の分解」→「課題の再構築」参照）。



まとめ：各グループでの地域課題を発表することで、参加者全員で共有した。加えて、次年度への移行期として何に取り組むべきか（＝地域課題）を明らかにした。

5. 考察

ワークショップでの地域課題の抽出はその過程を明確に示すことで成果が認められた。それは、①特定の専門職ではなく、地域ケア会議に関わった全員で地域課題を明らかにできたことである。そして、②ワークショップに参加したメンバーは今後の地域包括ケアシステムの構築において明らかになった地域課題の共有化を図ることができるだろう。

一方、本報告から発展させる課題も明らかとなった。まず、①A市での取り組みは専門職が主たるメンバーとして取り組んだものであった。今後、地域住民が抱えている地域課題との整合性を検証する必要があるだろう。そして、②地域ケア会議における単年度での地域課題の抽出に取り組んでいる。今後、経年変化を確認する必要があるだろう。

詳細は当日のポスターにて報告する。

■参考文献

山内祐平、森玲奈、安斎勇樹（2014）『ワークショップデザイン論－創ることで学ぶ』慶応義塾大学出版会